

くわずかである。

歩くしかなかった巡礼道が、交通機関利用の札所巡りに変貌していく。京都、大阪、奈良といった、都市周辺の札所が多い西国にあつては、かつての巡礼道は忘れ去られ、巡礼宿も廃業していく。明治後期から大正にかけ、すでに現在に近い巡礼スタイルになったものと思われる。荻原井泉水(一八八四—一九七六)の『観音巡礼』(一九二八)には、「徒歩する者は洋服にリュックを負うたあるかう会の会員といふてあひか、運動会気分のおばあさん連かになつてしまふ」と記し、「先を急ぐほんとうの巡礼は却て電車に乗る」と明言している。このことから、当時の巡礼が鉄道を積極的に利用していたことがわかる。というか、徒歩巡礼は昭和の戦前にしてすでに異端であつたのである。

一方、四国は鉄道の発達が遅れた。各県を結ぶ幹線は高德本線は一九三五年、予土線の全通に至つては一九七四年である。都市周辺の一部札所を除いては鉄道の恩恵をこうむることはできず、昭和になつても、昔ながらの徒歩遍路をするしかなかったのである。現在まで連綿として徒歩遍路が続いているのは、西国と異なり交通の便が悪かつたゆえに徒歩の遍路道が保存されていたこと、そして同様の理由で、遍路宿が残っていたことに尽きるといえる。

三月の東日本大震災以後、四国遍路の数が減つたと聞くが、遍路宿に宿泊する関東以北の巡拝者が減つたのが影響していると思われる。日帰りが主体の四国、近畿からの巡拝者はもともとあまり宿泊しないからである。

四国遍路のグローバル化に関する一考察

浅川 泰宏

近年、聖地・巡礼が世界的にブームである。リーダーによれば、ヨーロッパのカトリックの巡礼地では一九九〇年代後半から例外なく大幅な巡礼者数の増加があり、インド、アメリカ、サウジアラビアなどの多くの聖地・巡礼地でも同様の傾向がみられ、巡礼者の相互交流も盛んになっているという(イアン・リーダー「現代世界における巡礼の興隆―その意味するもの」(国際宗教研究所編『現代宗教二〇〇五』東京堂出版、二〇〇五年)、二七九—三〇五)。日本の四国遍路でも巡礼者数が増加した。佐藤久光によれば、一九七〇年代後半から二〇〇〇年代にかけて四国遍路の巡礼者数は、二万人弱から八万人強と四倍以上になったという(佐藤久光『遍路と巡礼の社会学』人文書院、二〇〇四年)。遍路姿の外国人を見かけることも増えてきた。Lonely Planetに四国遍路の記事が掲載され、歩き遍路のバイブルといわれているガイドブックも英訳されたり、英語、中国語、韓国語などの地図やパンフレットが作成・配布されたりするなど、外国語による情報も流通するようになった。ある伝統的な聖地や巡礼が、その「伝統」を支えてきた地域社会を越えて広く外部に知られるようになり、また外部からの巡礼者が訪れるようになる状況を、当該の聖地・巡礼のグローバル化と呼ぶならば、四国遍路においてもまさにそうした状況が進んでいる。こうした動きに今後、大きく影響すると思われるの

が四国遍路の世界遺産化である。二〇〇〇年前後に端を発し、二〇〇六年には四国四県が共同して「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産暫定リスト入りを目指したが、現在は候補に留まっている。こうした状況を踏まえつつ、ひとまず世界遺産登録がなされる以前の現時点において、筆者が最近の調査で接する機会を得た資料をもとに、外国人遍路の動向を大掴みに理解することで、四国遍路のグローバル化の一端を垣間見ようというのが本発表の主眼である。

本発表で用いたのは、阿波最後の札所である二十三番薬王寺の隣町で接待活動を行う「牟岐町お接待の会」が、同会の提供する接待所の訪問者を記録した「訪問台帳」である。二〇〇一年三月から二〇一一年五月までの記録から、住所と氏名を手がかりに外国人遍路と思われる記録二四四件を抽出し、分析を試みた。

この結果、明らかになったのは次の四点である。

- (1) 海外から来る遍路は、アジア(特に中国)が少なく、欧州・北米が圧倒的に多い。一般的な訪日観光客の動向とはかなり異なる特徴を持つ。
- (2) 外国人遍路は二〇〇〇年代を通して増加し、二〇〇八～二〇〇九年のピーク時には二〇〇一年の約八倍になったが、二〇一〇～二〇一一年は減少傾向にある。
- (3) 外国人遍路は若年層が厚い。遍路全体では六〇代が四割を占めるのに対して、外国人遍路は二〇代が三四%と最も多く、二〇代と四〇代で六割を超える。
- (4) 歩き遍路の全体的な傾向をみると、二〇〇七年以降は巡

礼者数が減少に転じ、とりわけ二〇一〇年以降は、ピーク時の約半分という急激な落ち込みとなっている。

中国などのアジア系の遍路が少ない理由はいくつか考えられるが、ひとつの仮説として、キリスト教文化圏におけるサンテリアゴの存在など、「巡礼」に対する認知度や親近感が影響するのではないかという視点をあげておきたい。その意味では、四国遍路は「特殊」な観光資源といえるのかもしれない。また(4)のような歩き遍路の減少を示すデータはこれまで指摘されていなかったが、本資料の分析からは、平成期を通じてブームとされてきた歩き遍路がある種の転機を迎えた可能性が示唆されたことを指摘しておきたい。

巡礼者の定義をめぐる差異の所在

——イード&サルノウ後の展開——

土井 清美

巡礼という習俗の全体像を捉えようとした巡礼研究は、巡礼という材料を用いて宗教観やアクチュアルな社会関係を捉える方向へと脱中心化している。そのようななか、本発表は旅する人々巡礼者に関する議論に焦点を合わせ、研究対象となる「巡礼者」の差異がどこにあるのかを考える。

まず、コミュニケーションと対立言説という巡礼論の二大パラダイムにある類似性と課題、それを乗り越えるべく登場した運動(movement)アプローチの特徴などを整理する。そして近年